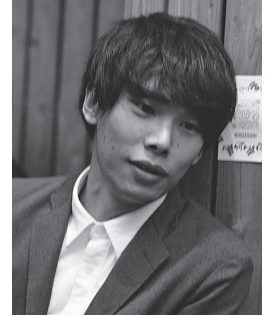


Outils de charpentiers et de bricolage - à travers les outils de travail du bois au Japon et en Europe

## 大工手道具とブリコラージュ — 日本と西欧の木工具を通して —

堀越 一希 / Kazuki Horikoshi



*Le mot « bricolage » dérive du verbe français « bricoler » qui signifie « réparer » ou « faire soi-même ». Aujourd'hui il est souvent employé en général pour parler des travaux demandant une certaine dextérité. Portant l'attention sur les outils manuels de base utilisés pour le bricolage, cet article se focalise en particulier sur des outils de charpentiers pour le travail du bois et explique, du point de vue du bricolage, les différences techniques entre les outils japonais et européens.*

### 1. ブリコラージュとは

本稿では、木工で用いられる基本的な道具として人の手で扱う大工手道具（電動工具のような機械化された道具ではない）を取りあげ、日本と西欧の木工具の世界をブリコラージュという視点から読み解いていこうと思う。

はじめに、題目にあるブリコラージュとは何かについて触れておく必要がある。フランスのホームセンターには bricolage と文字で描かれた看板が掲げられていることがよくある。既知の通り、「修繕する」「自作する」を意味するフランス語の動詞 bricoler に由来する名詞であり、ブリコラージュとは一般的に「器用仕事」という意味で理解されることが多いだろう（多様な分野によってしばしばブリコラージュの意味が若干異なっているが、本稿では一般的に捉えられる「器用仕事」の意味として扱う）。

ブリコラージュを語るうえで外せないのが、フランスの人類学者クロード・レヴィ＝ストロース (Claude Lévi-

Strauss, 1908-2009) が1962年に出版した著作『野生の思考 (La Pensée Sauvage)』である。名著とは時代を経て繰り返し読まれていくものであるが、本稿では次章以降で触れる大工手道具の世界を読み解く手がかりとしてレヴィ＝ストロースのいうブリコラージュ、そして〈構造〉というキーワードを基に話を展開していくことにする。本書の内容について詳しく触れることはしないがレヴィ＝ストロースのいうブリコラージュとは、「端切れや余り物を使って、その本来の用途とは関係なく当面の必要性に役立つものを作ること」にほかならない。ありあわせの材料を使って自分自身の手で作る。つまりは「器用仕事」である。しかし、それはほんの触り程度の意味でしかない。ブリコラージュとは単に「器用仕事」という意味を超え、常に〈ゆらぎ〉のような不安定さを孕んでいる。例えば、仮にもものづくりに精通していない素人が日常生活において日曜大工をするとき、何を作るかひとまず目標を立て、材料を選び、どうい

方法で接合するのか、可動の部分をどう作るのか、いちおう下書きのような設計図を描いたとしても簡単には作れないはずである。必然的に、完成まで試行錯誤を繰り返すことになるが、多くの場合当初予定していた目標とできあがったモノとの間にはズレが生じているはずである。イメージと実体験の誤差あるいは制作中にアップデートされた思考と形状の変化、その〈ゆらぎ〉の先に豊かなモノの世界が表れる。それこそがブリコラージュの最も興味深いところだと私は理解している。

建築史家、大工手道具研究の第一人者である故 村松貞次郎氏 (1924-1997) は1976年に出版した著作『道具曼陀羅』で以下のように言及している。

「道具は買ってきて使うものではない。自分でつくるものだ。…自らノコギリの目立てをし、スミツボを彫り、カンナの台をつくるのが昔の大工であった。…道具は機能だけの存在ではない、姿のよいもの、風格のあるもの、彫りや飾りをつけたもの、それは様々

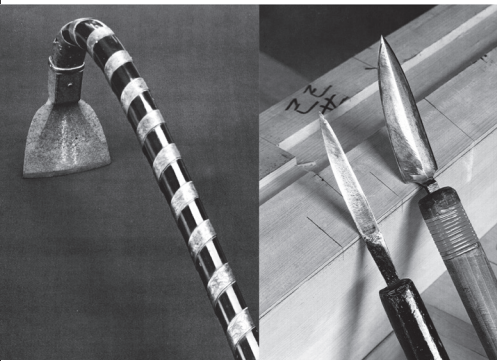


図1 東大寺儀器のチョウナと法隆寺大工のヤリカンナ(写真:岡村茂男,道具曼荼羅, p.77,95)

だが粹な道具がもっとも多い。…見栄と言ってしまうのは酷だ。やはり意地である。」

道具とは手入れをすることが前提であり、さらに道具を作るための道具の存在や機能を越えた豊かな世界が示唆される。プリコラージュという世界が創られるのは何も作品や建築といったモノだけではなく、道具もまたプリコラージュによってアップデートされくゆるぎ>のような変化やく構造>と共にあるのではないかと推察できるのである。

## 2. 日本のチョウナ・カンナ・ノコギリ

日本の大工手道具について、木工における代表的な道具としてチョウナ・カンナ・ノコギリを取りあげてみよう。建築技術が高度化した弥生時代以降、日本における主な建築用材はヒノキ・スギといった針葉樹であった。いまや身近な鋼製の縦引きノコギリが日本に伝わったのは15世紀頃とされていて(※所説有り)、それまでは木材を「打ち割り式」と呼ばれる方法で製材していた。その製材方法は、針葉樹に小さな穴をあけてクサビを叩き入れ繊維方向に引き裂くというもので、割裂性のよい針葉樹の物性を利用した原始的な方法である。「打ち割り式」で製材した木材表面はかなり荒れており、ここでチョウナとヤリカンナという道具が発生する(図1)。

道具の使用手順としては、まず荒れ

た木材表面をチョウナではつり、次にヤリカンナで凹凸面をさらに平滑に削り仕上げるといった順に用いられる。チョウナは曲がった木の枝の先端に石器を付けた原始的なオノの形状を起源としており、その姿形が後述する台カンナへと次第に形状が変化していったと推定されている(図2)。建築工事の儀礼として「チョウナ始め」という言葉が現代でも残っているように、日本において美に奉仕するための初原的な道具がチョウナであった。そのためチョウナは日本の大工における三種の儀器の一つとされ、スミツボ・サシガネと共に位置付けられている。

そしてようやく鋼製の縦挽きノコギリが15世紀ごろ日本へ伝わるが、それは巨大なノコギリで、オガと呼ばれていた(図3)。オガには刃渡り2mを超えるものもあり、刃の向きが中央から上下逆さに付いている。使い方は2人で両端を持ち、お互いに挽き合せて木材を縦挽きするという道具である。

そして縦挽きノコギリ、オガの使用と共に台カンナが出現する(以下、本稿ではヤリカンナと区別するためにカンナではなく台カンナと呼称する)。台カンナはノコギリで切断した綺麗な切断面だからこそ使える道具であり、チョウナではつった凹凸の激しい木材表面にはとてもではないが使えない。すなわちチョウナとヤリカンナのセット、そしてノコギリと台カンナのセットとして道具が使われていた。尚、台カンナは日本由来の道具のように思われるが、全くそうではなく完全に外来の道具である(西欧で台カンナは古代より存在しており記録として様々な絵図や資料が残っている)。しかしその使用方法に大きな違いがあり、西欧ほか外来の台カンナは道具を押して削る“押し使い”なのに対して、日本の場合は道具を引いて削る“引き使い”という特徴がある。これは世界でも珍しく日本独自の使い方である。

また日本にはキワカンナという台カンナがあるのだが、その名前の通り木材のキワや入隅を削るために使う道

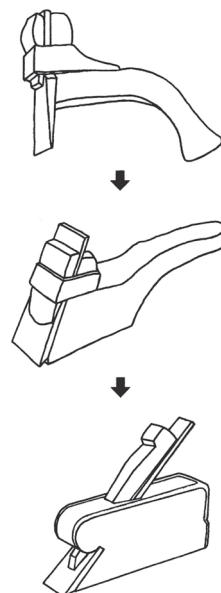


図2 原始的カンナの製作プロセス※推定(渡邊晶,大工道具の文明史,p.120)

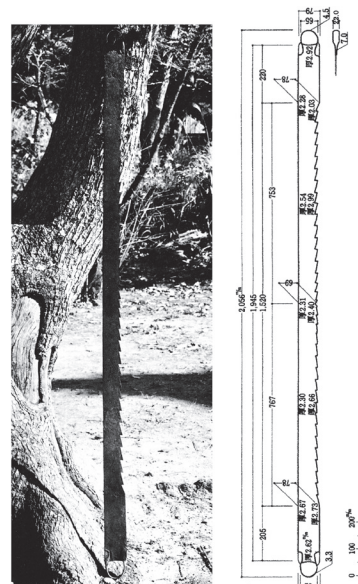


図3 岩嶺山石峯寺のオガと実測図(写真:岡村茂男,道具曼荼羅,p.41)

具で、逆目の出やすい針葉樹を年輪に沿って削るために刃鋼の向きが異なる左右一対の道具である(図4)。日本にはこういったペアの大工手道具をよくみることができるが、どちらか一方の道具が欠けると仕事にならない。木肌の美しさという言葉があるように“引き使い”そして左右一対というのは正に仕上げの美に貢献する道具のあり方である。

こうした道具のあり方はノコギリにも見ることができる。ノコギリのなかには両刃が付いているものがあり、左右の刃で形状と使用用途が全く異なる(図5)。横挽き刃は繊維方向に直行して



木材を断ち切り、小さな刀のような刃先で削り取る原理に対して、縦挽き刃は繊維方向と並行にノミの原理で木の皮をめくりあげて削り取るという大きな違いがある。こうした両刃あるいは片刃のノコギリは現代では普遍的な道具の形状として認識されるが、実は長方形ないし台形のノコギリは明治期になって変形したつい最近生まれた形状だということはあまり知られていない。

1712年に発行された『和漢三才圖會』という日本の百科事典には、木の葉を半分にしたような形状が描かれており、江戸期にかけて最も一般的に使用されていたノコギリだという(図6)。ではなぜこのような形をしているのか。木の葉型ノコギリの特徴は、現在でいう引き回しノコギリ(穿孔加工や曲線加工)・畔挽きノコギリ(溝加工)・横挽きノコギリの役割を併せ持ついわば万能ノコギリであった。江戸から明治期にかけて木の葉型ノコギリが有する万能な機能はそれぞれの用途に特化したノコギリへと分化し、今日

のノコギリに至ったとされている(※所説あり)。

チョウナ・カンナ(ヤリカンナ・台カンナ)・ノコギリのいずれにしても、日本にしかみられない大工手道具の共通点としていずれも“引き使い”であるという特徴があり、この<構造>を説明するうえで日本の建築用材として針葉樹が用いられてきたという点、そして道具を用いる際の作業姿勢が密接に関係している。日本では作業台に材料を置くのではなく、職人が地べたに座るもしくは中腰になり枕木に材料を寝かせて加工するのが一般的である。そのため自らの足と下半身で材料を固定し、腰から腕にかけて身体の可動域をスクロールするような作業姿勢が求められたことで必然的に日本の大工手道具は“引き使い”が最適であった。あるいは柔らかい針葉樹だからこそ、材料を固定せずとも道具の刃鋼が鋭利に研がれていれば容易に引いて削ることができたといえる。時代を経て道具の姿形やその用途が変化していった<ゆらぎ>の歴史と、“引き使い”という作業姿勢や針葉樹に対する刃鋼のあり方に日本の大工手道具の<構造>の一端を見出すことができよう。

### 3. 西欧の大工手道具

続いて、西欧の大工手道具をいくつか取りあげる。ユーラシア大陸の西、イギリスとフランスからドイツにかけて

の植生はビーチ・オークといった落葉広葉樹林が支配的であり、その周辺から北東にかけて針葉樹林と広葉樹林の混合林が広がっている。19世紀フランスのチョウナには厚く鈍角の刃鋼がついており、いかにも硬木の広葉樹を加工するのに適した形状であることが一目して理解できる(図7)。しかし西欧であっても、植生の約8割が針葉樹林であるオーストリアで生まれたチョウナの刃鋼は薄く鋭く鍛えられ、日本でみられる刃鋼とよく似ている。

では広葉樹を加工するノコギリ・台カンナはどうか。19世紀スイス、イギリスの横挽きノコギリは台形あるいは長方形の刃鋼が付いており日本の刃鋼と大きく変わりはないが、柄の部分が特殊である。人の手指でどのように道具を握るべきなのか、そのガイドとしてのグリップが柄の形状として現れている。このグリップは西欧の台カンナにも同様にみられ、硬木の広葉樹にグリップを通して人の力を合理的に伝えるためにいずれも“押し使い”となっているのである(図8)。

また広葉樹を鈍角の刃鋼かつ“押し使い”の道具で加工しようとすると材料自体が動いてしまうため、その固定具が必要になる。西欧では重要な木工具の一つとして作業台と固定具が紀元前から使用されていることがわかっており、基本的に立位作業であった。作業台がある場合の作業姿勢はまず片手で材料を抑え、もう片方の手で道具を扱うことになる。あるいは材料を固定具で留めた場合、両手足と身体はフリーとなりグリップを通して人の全体重を道具にかけることができる。すなわち作業台・固定具の存在によって必然的に西欧の大工手道具は“押し使い”が最適であり、硬木の広葉樹を加工する重労働の体を成すような<構造>が表れている。

削る・切断するという道具以上に重要なのが穴をうがつための道具だ。西欧の木造建築は部材同士の接合部に「木栓」を用いた構法で建てられることが多くあった。その「木栓」を収める



図4 キワカンナ(写真:岡村茂男, 道具曼茶羅, pp.147-149)

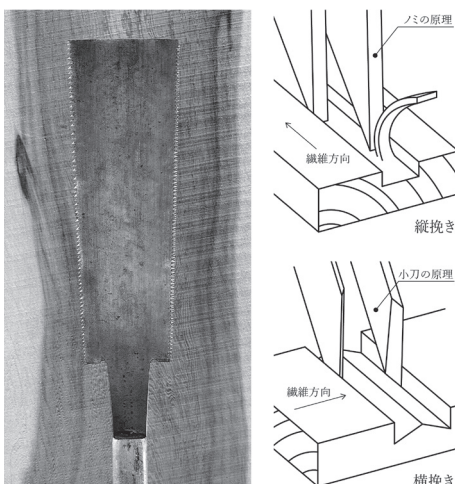


図5 両刃ノコギリとその刃型(写真:岡村茂男, 道具曼茶羅, p.86)

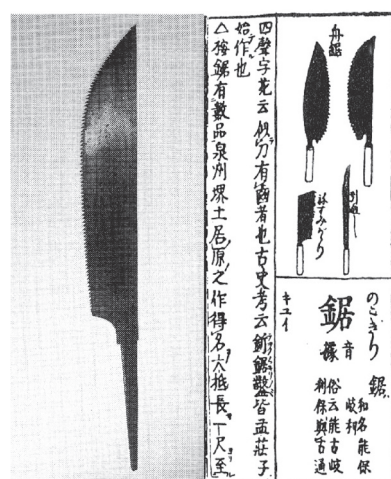


図6 木の葉型ノコギリ(三重県下郡遺跡出土(推定15-16世紀)宮野鉄之助による復元。和漢三才圖會より抜粋)



図7 19世紀フランスのチョウナ(写真:齊藤保憲, ヨーロッパの伝統木工具, p.53)



図8 左上:17世紀フランスの台カンナ / 左下:19世紀スイスの溝挽ノコギリ / 右:19世紀イギリスのノコギリ(写真:齊藤保憲, ヨーロッパの伝統木工具, p.81,87,97)



図9 左:18世紀オーストリアのハンドルキリ / 右:18世紀スイスのポートキリ(写真:齊藤保憲, ヨーロッパの伝統木工具, p.115,119)

穴をうがつ道具としてトゥワイビルという巨大なツルハシに似た道具があり、木を砕くようにして穴をあけていた。他にもネジのような刃鋼の軸を中心にグリップを回転させて穿孔するハンドルキリや、刃鋼と直行したグリップの上から人が体重をかけてねじ切るように穴をうがつポートキリなど、スクリューの原理を応用した道具がある(図9)。こうした西欧の大工手道具は人が扱うための機能的な形状として現れる一方で、道具自体に様々な紋様や造形が施されていることが多い。その

なかには人の身体構造を道具の姿形へ憑依させたような、生々しさのただよう道具も存在している(図10)。

#### 4. モノと人が対話する手段としての大工手道具

これまで日本と西欧の大工手道具についていくつかの例をあげたが、やはり大工手道具にはどこか合理を超えた思想のようなものが見え隠れしているように思えてならない。例えば、日本の大工手道具にはグリップのように人が使うためのガイドとしての形状はみられず、作業中は汚れて汗ばむ手を必死に拭いながら道具を掴むほかない。ノコギリやキリの柄は質直な木の棒そのものであり、台カンナの鉋台は直方体の木塊である。禁欲的な道具の形状かつあくまでも人は道具に奉仕するものという思考の表れとして日本の大工手道具は存在しているように感じられる。一方で、西欧の大工手道具(とりわけ広葉樹を加工するための道具)にはグリップやスクリューといった合理的かつ機能主義的な形状がまずあり、さらにそれらを擬して意匠が多分に施される。道具は人が使い愛でるものという思考の表れとして西欧の大工手道具(として一括りにしてしまうのは軽率だが)は存在しているように思われるのである。

本稿は日本と西欧の大工手道具とブリコラージュ、それらの関係について何か大それた論を展開してきたわけではない。冒頭でブリコラージュとは単に「器用仕事」という意味を超えて「ゆらぎ」のような変化と「構造」を孕

んでいるのではないかと述べたが、やはりブリコラージュとは完成した作品や建築に留まらず、それらを作り出す大工手道具もまた、加工する材料、その作業姿勢及び道具の扱い方、あるいは道具やモノに対する思想によって深い意味の世界が展開してきたといえそうである。木鉄石を問わず自分で切り・削り・叩き・収め、モノと人が対話する最も有効な手段として道具があり、道具にこそブリコラージュの小宇宙が詰まっているのではないかと感じるのである。

#### 参考文献

- ・寺島良安(編),『和漢三才圖會』,1712
- ・村松貞次郎,『大工道具の歴史』,岩波書店,1973
- ・クロード・レヴィ=ストロース(著),大橋保夫(訳),『野生の思考』,みすず書房,1976
- ・村松貞次郎(著),岡村茂男(写真),『道具曼荼羅』,毎日新聞社,1976
- ・村松貞次郎(著),岡村茂男(写真),『続・道具曼荼羅』,毎日新聞社,1978
- ・村松貞次郎(著),岡村茂男(写真),『続々・道具曼荼羅』,毎日新聞社,1982
- ・村松貞次郎(1984),『西洋道具図鑑』,ヨーロッパの民芸, p.57-63
- ・村松貞次郎(監修),『ヨーロッパの伝統木工具』,竹中大工道具館,1992
- ・村松貞次郎(著),岡村茂男(写真),『新道具曼荼羅』,毎日新聞社,1997
- ・村松貞次郎,『道具と手仕事』,岩波書店,1997
- ・初田亨,『職人たちの西洋建築』,講談社,1997
- ・渡邊晶,『大工道具の文明史』,吉川弘文館,2014
- ・渡邊晶,『大工道具の日本史』,吉川弘文館,2018



図10 19世紀フランスのキャリバー(写真:齊藤保憲, ヨーロッパの伝統木工具, p.75)